

自己評価報告書

平成 23 年 5 月 16 日現在

機関番号：14403
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：平成 20 年度～平成 23 年度
課題番号：20530594
研究課題名（和文） 中学生のカウンセラーに対する被援助志向性を高めるための介入プログラムの開発
研究課題名（英文） Developing an intervention program for junior high school students which enhance willingness to seek help from school counselors.
研究代表者
水野 治久（Haruhisa Mizuno）
大阪教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：80282937

研究分野：学校心理学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：被援助志向性，スクールカウンセラー，学校心理学

1. 研究計画の概要

本研究の目的は中学生のスクールカウンセラーに対する被援助志向性を高めるための介入プログラムを情動コンピテンス，メンタルヘルスリテラシーに注目して開発・実践することである。

2. 研究の進捗状況

平成20年度に情動コンピテンス尺度と被援助志向性の関連を確かめ，平成21年度は二つの中学校を調査し，メンタルヘルスリテラシー尺度，情動コンピテンス尺度とスクールカウンセラーに対する被援助志向性の関連を検討した。適応得点が平均値以下の200名を対象に分析した結果，メンタルヘルスリテラシーがスクールカウンセラーに対する被援助志向性に影響を示していた。そこで，平成22年度は，大阪府内A中学校の145名（4学級）を対象に50分の介入プログラムを開発・実施した。効果測定を行ったところ，メンタルヘルスリテラシーの下位概念である，「落ち込みを忍耐不足，努力不足と考える傾向」は有意に低下した。これは介入によりメンタルヘルスリテラシーが高まったと考えられる。更に，被援助志向性の「援助に対する懸念・抵抗感」も有意に低下した。

3. 現在までの達成度

平成 22 年度の介入プログラムの実践において，メンタルヘルスリテラシーに介入の効果が認められたことで，ある程度，研究の目的は達成できたと考える。

4. 今後の研究の推進方策

本年度は以下のことを行う。

1) 今年度も府内A中学校において引き続き介

入を行いたい。現在，A中学校の管理職，養護教諭，スクールカウンセラーとの打ち合わせを計画中である。プログラムの内容については，A中学校の実情にあったものとした。

2) 昨年の介入プログラムについては，①落ち込むことの心理学的説明，②落ち込むことに対する否定的な認識の弊害を強調した。今年度も引き続き，同様の内容で行う予定であるが，ワークを多く入れ，生徒同士の話し合いの場面を作ること，スクールカウンセラーや養護教諭からの説明内容の充実を図りたい。

3) 今年度は研究の最終年度にあたる。今までの知見を整理し，報告書に執筆に取りかかるとともに，投稿論文を準備し，研究成果を広く公開していきたい。具体的には昨年度までの調査結果を投稿論文にまとめるとともに，昨年度の介入プログラムについても論文にまとめていきたい。

5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

木村真人・水野治久 学生相談の利用を勧める意識に関連する要因の検討 心理臨床学研究, 28 巻, 238 -243. 2010 年, 査読有り
水野治久 自立した人間は依存しない人間か?—甘え上手を育てる 児童心理, 911 (4 月号), 18-22. 2010, 査読無し

〔学会発表〕（計 2 件）

水野治久・林照子・山口豊一 2010 メンタルヘルスリテラシー，情動コンピテンスがスクールカウンセラーに対する被援助志向性に及ぼす影響 日本心理学会第 74 回大会発

表論文集 1323.

河村茂雄・品田笑子・伊佐貢一・水野治久・
鈴木敏城・石隈利紀 2010 教育実践を充実
させる学級経営 日本教育心理学会第 52 回
総会論文集（早稲田大学）82-83.

〔図書〕（計 1 件）

水野治久 子どもは教師に相談するのか—
子どもの被援助志向性にそった教育相談の
あり方— 大久保智生・牧郁子編 実践をふ
りかえるための教育心理学—教育心理にま
つわる言説を疑う— ナカニシヤ出版,
145-157. 2011, 査読無し

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

なし。